

少量なら認知症予防の可能性

多量に飲酒する人には、脳萎縮、特に前頭葉の萎縮がよく見られます。過度に飲酒したりアルコールを乱用すると、認知症になる人が多いことも知られています。逆に、少量の飲酒は認知症の予防になるという調査結果も報告されています。

STOP! アルコール依存症

久里浜医療センター 松下幸生 副院長

アルコールの脳への影響については、大量に飲酒する人に脳が小さくなる脳萎縮が高い割合でみられます。最近の調査によれば、飲酒量と脳萎縮の程度には正の相関が見られることが報告されています。すなわち飲酒量が増えるほど、より脳が萎縮するということです。一方で飲酒による脳萎縮は断酒することで改善することも知られています。施設に入所している認知症の高齢者の29%は大

日刊スポーツ 平成27年5月21日

酒の強さは遺伝子が決めている

飲酒して顔が真っ赤になる人と顔色の変わらない人がいることは、ご存じでしょう。アルコールで赤くなる、ならないといった体質は遺伝で決まっています。

STOP! アルコール依存症

久里浜医療センター 松下幸生 副院長

アルコールは主に肝臓で酵素の働きで分解されます。まず、アルコール脱水素酵素によってアセトアルデヒドに分解されます。このアセトアルデヒドは発がん性のある有害物質です。

基本的に顔色が変わりません。弱い、全く働かないタイプの人には、ビールをコップ一杯飲んだだけで顔が赤くなります。身体が赤くなったり、頭痛がしたり、胸がドキドキしたりします。これらの変化は、アセトアルデヒドによるものです。ALDH2の働きが弱い人は赤くならずともある程度なら飲酒できますが、全く働かない人は

アセトアルデヒドを無毒な酢酸に分解するのも酵素で、ALDH2が主に働きます。日本人をはじめ中国人、韓国人など黄色人種にはALDH2の働きが①強い②弱い③全く働かない④の3つのタイプがあります。酵素の働きが強い人は、飲酒しても

最近ではアルコール代謝酵素の遺伝子検査をする会社もあるので、興味のある方は調べてみてはいかがでしょうか。

日刊スポーツ 平成27年5月22日